

ふるくも有つらんかし、ふとはえおもひいです、これはいとくすぢなき事なり、さるはから國に、某陰某陽といふ所の多かるにならひてのわざなめれど、かの陰陽は、南北のかへもじにて、山にそひ水にそひたる地の、その山水の南につきてよぶ事にこそあれ、皇國の人の伊勢を勢陽尾張を尾陽といふたぐひにはあらず、洛陽華陽などきこゆるも、洛華は、山水のぞかし、益州を益陽、荊州を荆陽といへる事はあらじ物をや。略下

〔日本書紀神武三〕其年○甲寅十月辛酉天皇親帥諸皇子舟師東征○中行至筑紫國。菟狹菟狹也、此云宇佐者地名時有菟狹國。造祖號曰菟狹津彥菟狹津媛。乙卯年三月己未徙入吉備國、起行宮以居之。戊午年二月丁未、皇師遂東舳艤相接方到難波之崎、會有奔潮太急、因以名爲浪速國。二年二月乙巳、天皇定功行賞○中以珍彥爲倭國。造○中以釿根者爲葛城國造。

〔古事記傳二十九〕大凡諸國の古の分ざまは、後世の國を分て郡とし、郡を分て郷とせられたる如くに際々しくはあらで、國の内なる地をも、又國と云るたぐひ多し、此記に陸奥、石城國造、常道、仲國造などあるが如き、陸奥も國なるに、其國內なる石城をも、同く國と云、常道の國內の仲をも、同く國と云々又書紀繼體卷の歌に、春日國萬葉に吉野國、初瀬國なども云るが如し、是後に郡と定められたるほどの地などをも、通はして同く國とも云しなり。略下

〔日本書紀景行〕十二年十月、到碩田國。其地形廣大亦麗因名碩田也。碩田此云於保岐陀十二月丁酉議討熊襲。於是天皇詔群卿曰、朕聞之熊。據一本補襲國有厚鹿文、迄鹿文者。十八年六月丙子、到阿蘇國也。七月甲午、到筑紫後國御木居於高田行宮。時有僵樹長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來。略中爰天皇問之曰、是何樹也。有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先當朝日暉、則隱杵島山當夕日暉、覆阿蘇山也。天皇曰、是樹者神木故是國宜號御木國。丁酉到八女縣。略中時水沼縣主猿大海奏言有女神名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名、由此起也。